http://commonf.net　E-Mail:jimukyoku@commonf.net

茅風

— Breeze from the field of thatch-grass —

2017年5月24日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信５１号

今年の上ノ原の野焼き

■ 1月～5月前半の活動報告（事務局）・・・・・・・・・・・・・1
■ 第16回定期総会開催報告(事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・2
◆新年度執行体制及び新年度の主な活動計画・日程
◇総会セミナー報告(米山正寛)
「過疎の村と東京二拠点移住の可能性」
（講師・夏目啓一郎）
■ 2016定例活動⑧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
「茅仕事・雪原かんじき体験・キャンドルナイト」
◆開催報告(草野洋)
◇参加者レポート(小沢律子)
■ 流域連携と流域コモンズ活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
◆参加報告(草野洋)
■ 日本生態学会全国大会事例報告(増井太樹)・・・・・・・・5
■ えひめ千年の森をつくる会「炭焼講座」(草野洋)・・・・・・6
■ 定例活動2017①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
「茅野の野焼きと早春の里山散策」
◆開催報告(草野　洋)
◇参加者レポート(インドレック・メルツ)
■ 藤原現地報告(北山郁人)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
■ 藤原の“ほっと”ショットコーナー(中村智子）・・・・・・・11
■ 野守のつぶやき（清水英毅）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
編集後記　（敬称略）

【　１月　】

●21、２２日、地域連携活動として小貝川および菅生沼の野焼に合計のべ１０名参加。

【　２月　】

●環境省の発行する「平成28年度生態系サービスを活用した自然再生に関する事例集」に青水の活動が収録。

【　３月　】

●１１日、１２日、一般参加歓迎プログラム⑦「茅スグリと雪中トレッキング」実施　１４名参加。
●１４日、早稲田大学で開催された生態学会の中で、津田先生による自由集会「草原再生における現状と課題 ～研究者と市民の視点から～」に参加、青水の上ノ原での活動も報告
●「えひめ千年の森をつくる会」炭焼き講座に塾長らが参加。

【　４月　】

●１日よりみなかみ町の青水担当課が、エコパーク推進課森林環境グループに変更。
●１５日、第１６回定期総会開催。終了後、セミナー「過疎の村と東京二拠点移住の可能性」実施、講師は地元移住のフリーランスカメラマン夏目啓一郎氏。
●１０日から野焼きに向け上ノ原の除雪開始。野焼一週間前には、草野塾長が炭を使っての融雪実験実施。
●２９日、３０日、2017年度第①回一般参加歓迎プログラム「春の風物詩・上ノ原茅場の野焼き」実施。５８名＋現地１０名以上が参加。野焼の他、ツイストパン焼き、燻製作りを楽しむ。

【　５月　】

●１３日、麗澤中学校樹木観察会の下見に１５名参加。２０日の観察会では１９名の青水関係者がインストラクターとして、10グループ１４８名の生徒を指導。

（以上）

■第16回「定期総会」開催報告
2017年度の事業計画等を承認

◆飲水思源の志と人と自然のほどよい関係◆

森林塾青水の第16回定期総会は、4月 15 日に東京都渋谷区の環境パートナーシップ・セミナースペースで開催されました。昨年度の活動を草野塾長が画像を映しながら報告するとともに、新年度の事業計画・予算案や役員の異動などが審議され、原案通り承認されました。尚、本会の学監をつとめられてきた高野史郎幹事は、本年度より本会の顧問に就任することとなりました。

また、総会には、4月1日よりみなかみ町における当塾の窓口となったエコパーク推進課の高田悟課長及び同課の森林環境グループリーダー小林勲氏も参加し、それぞれ挨拶をいただきました。

◆新年度執行体制
～顧問・幹事・オブザーバーの紹介

塾　長
　草野　　洋：全般統轄
塾　頭
　*北山　郁人：全般統括補佐、みなかみ事務所長、地元連携窓口、古民家再生・活用他
幹事
　浅川　　潔：事務局長
　稲　　貴夫：「茅風」編集長、東京楽習会他
　岡田伊佐子：自然ふれあい学習他
　西村　大志：草原再生ネットワーク、草原サミット他
　増井太樹：事業統括（流域コモンズ・連携促進他）
　松澤英喜：事務局長補佐（発信活動促進、会員管理、HP・ブログ、助成事業他）
　*吉野一幸：地元代表、NPO奥利根ネットワーク、古民家活用・交流促進他）
　米山正寛：コラボ／森林文化協会、発信活動拡充、流域コモンズ
監事
　林部良治：会　計（年会費、経理統括）
顧問
　原　剛、安楽　勝彦、笹岡　達男、滑志田　隆、清水　英毅、高野　史郎
オブザーバー　／　相談役
　*小林　勲：行政／みなかみ町役場窓口（エコ・パーク推進課）
　*林　　親男：地元／「上ノ原運営協議会」窓口（藤原案内人クラブ）
　川端英雄：アドバイザー

＊印はみなか町在住の役員です。

森林塾青水は今年度も、「自然の恵みを持続的に利用する仕組み」の構築、維持と、そのための上ノ原「入会の森」の茅草原、ミズナラ林のほどほどの保全と活用を目指して、流域全体との連携を大切にしながら取り組んでまいります。今年度の役員構成と行事予定はご覧の通りです。引き続き皆さまのご理解とご協力をお願い致します。

上はエコ・パーク推進課お二人の紹介。下は挨拶する高野新顧問と、総会議長をつとめた清水顧問

◆2017 年度の主な活動計画・日程

定例活動をはじめ各種行事は、開催日の約一カ月前を目途にホームページに掲載する予定です。皆様のご参加を心からお待ちしています。

月	主な行事（一般参加歓迎プログラム・東京楽習会等）
4	・定例活動①山の口開き・野焼き/29（土）・30（日）
5	・定例活動②藤原の山菜を楽しむ/27日（土）・28日（日）
6	・定例活動③ミズナラの若返り（自伐型林業体験）/24（土）・25（日）
7	・定例活動④防火帯刈り払い・木馬道再生/22（土）・23（日） ・東京楽習会①（未定）
8	・定例活動⑤藤原の地域行事と地域活動地訪問（未定）
9	・定例活動⑥日光茅ボッチの会との連携プログラム/30（土）・1（日） ・東京楽習会②（未定）
10	・定例活動⑦茅刈り/21日（土）、22日（日）
11	・定例活動⑦茅出し・山の口終い/18日（土）、19日（日）
12	・東京楽習会③（未定）
1	・流域連携活動：小貝川の野焼/20（土）、菅生沼の野焼き/21（日）
2	・流域連携活動：理窓公園（東京理科大野田キャンパス）での湿地保全活動（未定）
3	・定例活動⑧茅スグリ・雪原カンジキ体験・キャンドルナイト/10（土）・11（日）

上記の定例活動等に合せて、車座講座、生き物調査、外来種駆除、そして古民家利用・古道整備・県道の側溝整備などの地域貢献活動を実施する予定です。また、幹事会は原則として毎月第三火曜日に開催しています。

■総会セミナー　講師　夏目　啓一郎
「過疎の村と東京二拠点移住の可能性」
米山　正寛

総会に続いて、講師に夏目啓一郎さんをお招きしセミナーを開催しました。夏目さんは現在 36 歳で、映像技術会社勤務を経て 2007 年からフリーカメラマンとして活動中です。2 年近く前に、群馬県みなかみ町藤原地区へ、埼玉県さいたま市から家族（妻と息子）とともに移り住むとともに、ご本人は東京都府中市にも住居をかまえて東京での仕事もこなすという生活をされています。NPO 法人奥利根水源地域ネットワークの活動にも参加し､｢藤原の住人を増やしたい」と熱意を燃やす夏目さんに、得意の映像や写真、音楽を交えながら、実践中の 2 拠点移住の可能性をテーマに語っていただきました。

冒頭から「移住が流行っていると毎日のように聞く。でも、それは幻想だと思う」と切り出しました。男性はロマンを求めて前のめりなのに対し、女性は現実を見ているようです。だから「いきなり冒険する必要はない｣というのがアドバイスであり、体験に基づく一つの提案が 2 拠点移住なのです。

人生では、自分の状況が大きく変わることがあります。災害とか、親の介護とか、子育てとか、いろいろと想定できますが、拠点が二つあればうまく立場を切り替えることが可能になるかもしれません。夏目さんは「仕事は面白いし、収入も悪くない。マスコミ関係なので、それを東京以外でやるのは難しい。でも震災を経験して都市生活はハイリスクだと感じたし、子どもをのびのび育てたいという思いもあった」と、その活路を 2 拠点移住に見つけたわけです。妻子をみなかみ町藤原の自宅にすまわせながら、ご自身は東京都府中市のセカンドハウスも使って生活しています。毎月 2 週間以上は東京にいることが多いようですが、仕事がなければみなかみ町へ戻って、ご家族と過ごされています。

みなかみ町での移住を決めたのは、①自然の豊かさと人の良さ、②交通アクセスの良さ、そして③家賃の安さ、だったとのこと。①は森林塾青水の活動を通して、私たちも同感ですね。②は上毛高原駅から上越新幹線が使えることで、大宮駅まで最短なら 40 分ほど、東京駅も 1 時間余りです。③の家賃相場は都会に比べると、何分の一かという額です。

みなかみ町で暮らすようになり、本業のカメラマン以外に、スキー＆スノボのインストラクター、カヌーガイド、キャンプインストラクター、尾瀬＆苗場山ガイドなど､いろいろな仕事を経験されました。また「妻は民宿の手伝いやキャンプ場、スキー場の仕事をしてくれている」とのこと。通年雇用の仕事は難しいですが、今では「一つの仕事より、いろいろな仕事をこなせるという生き方もある」と考えているそうです。収入は少し減ったそうですが、食費や、家族で遊びに行くコストがかからなくなったことで､家計の状況は変わっていないと話されました。

もちろんデメリットもあります。貸家のリフォームにはドーンと費用負担がかかりました｡屋根､床、壁、窓、畳などを修理するのに、業者に依頼したり友人の協力を得たりして作業を進める中で、コスト軽減のため電気配線は自分で張り直したとのこと。窓の 2 重サッシや流し台はインターネットで探すと、半額くらいで買えたそうです。車は必要に迫られて 1 台から 2 台に増やし、除雪機も一家に 1 台が必需品なので購入せざるを得なかったようです。除雪には 1 日 1-2 時間を要するため、体力がないと暮らしていけない土地柄ですが、体力は「やっていれば勝手についてくる」というのが実感だそうです。このほか、東京との行き来にもコストと時間がかかります。でも､「デメリットを上回る体験をしている」と前向きに受け止めておられました。

みなかみ町藤原の人口は現在約 400 人。夏目さん一家の後にも、2 家族 6 人と独身者 3 人が移住してきているのですが、スキー場の従業員にも町外から通ってくる人が多く、もっと住人を増やすことが大きな望みのようです｡｢もともとの藤原の人たちには、都会の人が面白いと思うことが感覚的に分からないようだ。でも移住者は、その感覚を持っているので観光客相手の仕事には向いているはず」と、移住者にはその強みを生かしてもらいたいと考えておられます。そのためには、まず都会から観光客に来てもらうこと。そして夏の客には冬の遊びを、冬の客には夏の遊びを提案し、リピーターを増やしていくこと。そのようにして藤原ファンを増やしながら、地元との交流や異業種と関わる機会に参加してもらい、移住者が移住者を呼び込むという循環を築くのが、これからに向けた展望だそうです。お話の中には、藤原やみなかみ町に対する有意義ないろいろな提案も含まれていました。

こうした努力が実を結べば、青水塾頭の北山さんのようにどっぷり藤原に生活拠点を移す人も現れるでしょうし、夏目さんのような 2 拠点移住を選ぶ人も生まれるのかもしれません。藤原に新しい風を吹き込み、青水の活動にも協力してくださっている夏目さんを、ますます応援したい気持ちになりました。

夏目さん(右)と挨拶する笹岡顧問

■2016 定例活動⑧
「雪原トレッキングとキャンドルナイト」
草野　洋

今年の藤原の積雪状況は平年並ですが昨年が極端に少なかったせいか多いように感じられました。村の人に聞くと「今年の冬と雪はおかしい、雨が降ったり、暖かい日が続いたかと思うと急に寒い日が来る、ドカ雪があったかと思えば雨が降ったりした」とのこと。スキー場もそのあおりか集客は思わしくなかったようです。

青水の３月の活動は、11 日、地元のＮＰＯ法人「奥利根水源地域ネットワーク」が行うキャンドルナイトのかまくらづくりなどをお手伝いし、夜のイベントに参加するプログラムです。

今回は、朝日新聞のイベント欄を見ての初参加者が２組、決して大きくない紹介欄も興味がある人には目と心に留まるのですね。おかげで新たな青水ファンが増えます。朝日新聞に感謝です。

一人は、埼玉からの体を動かすのが大好きな日帰り参加者 K さん。そして、7 歳と 5 歳の姉弟がお祖母さん（孫たちはそう呼ばないで名前で呼ぶ）に連れられ参加しました。合計 14 人ですが、男性は大人３人に子供が１人のみ。女性陣に囲まれる夢のようなひととき・・・ん？

1 日目、宝台樹スキー場に着いた一行はさっそくキャンドルナイトのお手伝い。バケツを使ったキャンドル台づくりやカマクラに穴を掘ってキャンドルを置く作業、宝探しの宝物埋めなどをスタッフとして手伝いました。

4 時からはセレモニー、その後キャンドル点灯の後、夕食のため一旦宿（樹林）に帰りました。

夕食をとり再び会場に戻ると写真のようにかまくらがキャンドルで浮かび上がっていました。

気温はグーッと下がり頭の芯まで冷えるようなじっとしていられないくらいの寒さ。そんな中でのプロチーム「ゴロピカ」の圧巻のファイアーダンスは寒さを忘れさせます。

風があって期待した熱気球（手作りとのこと）は上げられませんでしたが、フィナーレの花火が月に向かって豪勢に上がりました。

観客は約 300 人とのことで、今年も大成功。地元 NPO の・企画力・行動力に脱帽です。

一行は、宿に帰り冷えた体をお風呂で温め、こたつを囲んで男性は肩身の狭い交流会で盛り上がりました。

2 日目は、大幽洞までの雪原トレッキングチームと古民家での茅スグリチームに分かれました。トレッキングチームは 8 時出発。往復約 4 時間のコースです。今年は積雪もあり雪が堅く歩きやすかったようで 12 時には登山口に降りてきました。

カラマツ林を往く

前日に大幽洞の氷筍は霊感が働いてうまく写真が撮れないとフェイクニュースを出しておいたのが効いたようで特に関心が大きかったようです。何事も興味があればですね・・・。うまく取れたと写真をいくつも見せられこちらとしては「してやったり」とニヤ

無事帰還

リ。

さて、茅スグリの方は・・・。去年は昼食用にボタを宿にお願いしていましたが今年はぜんざいと甘酒を茅スグリをやりながら自前の昼食を作り、トレッキングチームと合流して古民家で食べることにしていました。ところが始めてみると、火を熾す、小豆を煮る、味付け、餅を焼く、甘酒を作るなどはけっこう大変で片手間に出来るものではなく茅スグリは断念。女性３人、私、それに子供たちがつきっきりで約３時間半の奮闘の末どうにか昼食に間に合いました。地元の小豆と０料理長の腕が発揮されておいしく出来上がり皆さんに喜んでいただけたようです。お餅も炭火焼でふっくらこんがりで格別でした。

味を調える料理長

炭火で小豆と餅の香りが

厳しい雪原トレッキングのあと氷筍に会えた！！

小沢　律子

大幽前の氷柱(つらら)

氷の柱と書いて「つらら」。では、氷の筍は？それは「ひょうじゅん」と呼ばれる自然現象。洞窟の中にできる逆さまのつららで、大きなものは2メートルほどにもなるそうですが、水上ではもう少し小さいものを見ることができます。もちろん、冬なのでそれなりの装備が必要ですが。青水の冬のイベントとして、茅すぐりと同時期に行われる雪原トレッキングの目的地、大幽洞窟は、関東で氷筍を観察できる数少ないポイントです。

銀世界をトレッキング

私がこのトレッキングに参加するのは去年に続き２回目。去年は記録的な暖冬でスキー場も雪不足だったので、洞窟への道のりも楽だろうと思い参加したのですが、甘かった！確かに積雪量が少なくて林道は土が見えるくらいでしたが、そのせいで道はぬかるみ、歩ける道幅は狭くて、滑って沢に落ちるのではないかとドキドキ。何より、洞窟前の崖のようにも見える斜面はよじ登る感じで本当に大変だったのですが、そのときの案内の方が「今年は雪が少ないから大変だけど、雪が多いと逆に登りやすい」という言葉を聞いて、「それなら今年は去年より楽だね」との思いから再び参加したのですが…やはり甘かった!!最後の登りは雪があっても大変でした、が、氷筍は去年よりずっと大きくて本数も多く、筍というより大きなつくしんぼのようでした。見ようによってはムーミン谷のニョロニョロのようにも見えて。道のりは厳しかったけれどやはり頑張って来た甲斐がありました。

今年の氷筍

洞窟の入り口から見渡す山並みも白く輝いて、青空とのコントラストが素晴らしかったです。帰りの下り坂は基本、お尻で滑り降りる感じなので行きの苦労もすっかり忘れる楽しさ。上の原に戻ってくる頃には参加した皆が子供のような笑顔になっていました。今年のツアー参加者は女性ばかり。それも大半が初めて青水の活動に参加した方たちで、真っ白な雪山に感動しつつ、初めて履くカンジキに悪戦苦闘。四苦八苦しながらも和気藹々と雪道の散策を楽しんでおられました。山を降りたときには、青空に太陽をくるりと囲むような虹を見ることができて、今回も(辛かったけれど)参加してよかったなという気持ちでした。なんとか体力を維持して、来年もまた登ってみたいと思います。今回残念ながら途中リタイアとなってしまった方も、是非再チャレンジしてください！

■小貝川･菅生沼の野焼き

草野　洋

大学センター試験が終わって最初の週末は新春恒例の小貝川・菅生沼の野焼が行われます。

塾は流域連携の一環として参加しています。ここの野焼は河川敷に隣接していて市街地でありタチスミレなどの保全を目的として実施される点でも上ノ原の野焼とは違いがありますが、野焼きの安全なやり方など大いに参考になります。また、多様な団体や個人の支援者が参加していてその活動などを知りお互いの交流のきっかけになります。

小貝川の野焼き　前夜の雨で燃えにくい

菅生沼はよく燃え、高い炎が上がりました

今年は、塾から 1 月 21 日（土）の小貝川に 4 名、22 日（日）の菅生沼に 6 名が参加してオレンジのつなぎ服が活躍しました。

■日本生態学会全国大会　北山塾頭が発表

増井　太樹

日本生態学会第 64 回全国大会（2017 年 3 月 14 日）で「草原再生における現状と課題 - 研究者と市民の視点から - 」という自由集会が開催され、東日本各地の草原再生の事例の一つとして、北山塾頭から森林塾青水の事例が紹介されました。

この自由集会は、東日本で草原の再生・維持管理などを市民レベルで実践している団体に集まっていただき、それぞれが抱える問題点や課題のほか、うまく進んでいる状況などについても情報提供していただく場として企画されたもので、全 10 箇所の事例紹介がありました。(詳しくは岐阜大学津田研究室 HPhttp://www.green.gifu-u.ac.jp/~tsuda/2017jiyushukai.html を参照ください)

全国各地の事例で問題点として多かったのは後継者の問題でした。菅生沼（茨城県）の事例では「行政や地域住民主体で活動できるシステムではないので、博物館が主導できなくなったとき保全活動の危機となる」との意見が出され、安比高原（岩手県）では「人口減、高齢化のため、地元からの参加が減少し、都市住民の協力が必要」との指摘がありました。また、地域住民との意識の問題もあり、軽井沢（長野県）では「行政・会員・地域住民に、半自然草原の意味、草刈りの意義や成果などの情報が伝わっていない」との意見が出されました。

全国の保全団体が持つ悩みは、結構似通っているものも多いのだなという印象を持ち、そういう意味では、他団体と交流することで悩みや解決策の共有ができる可能性があるのではないかと感じました。

北山さんの発表は、他の事例発表とは異なり、「草原を守る」ことを主目的として考えるのではなく「草原を活用する」ということが主目的であるという発表内容でした。草原の生き物を守るには、その草原自体をどうやって活用するかを考えないといけませんし、森林塾青水や北山さんがこれまでずっと取り組んできたことはまさに、「草原を活かす」ことであったんだと改めて思い知らされる場となりました。

私自身、もっと草原を活かすことを考えて、提案していきたいと思います。皆さんの頭の中にも、「草原でこんなことしたら楽しいんじゃないかな」というものがあると思います。そういった知恵をみんなで出しつつ、新しい草原の価値を上ノ原からつくっていけたらいいなと改めて感じた自由集会でした。

■えひめ千年の森をつくる会「炭焼き講座」
～棚田が絶景のところで炭焼きしました～

草野　洋

12 月、当塾の東京学習会で講演いただいた愛媛の鶴見先生が主宰される「井内区　人・空・棚田を生かす会」と「えひめ千年の森をつくる会」が開催した「ありのままの自分に出会う炭焼き講座」に参加しました。今回は総勢 20 人、うち塾関係者が 4 人、3 月 18 日～20 日の遠路愛媛までの 2 泊 3 日の炭焼き旅行でした。

天空の棚田が続く井内地区

場所は、愛媛県東温市井内です。全日空のカレンダーに使われた天空の棚田の里です。道後温泉のある松山市内から伊予鉄道横河原線で横河原駅に行き、そこから県道 210 号を久万方面に車で 30、40 分、そこは目を見張るような棚田の絶景地でした。

ここでの炭焼き体験や正食・マスターライフ・メンタルライフのワークショップは私にとって「新鮮」で「貴重」な体験でした。

自分で何度も炭焼きをやっていますが憧れのウバメガシの炭材を焼くことができ、鶴見先生のその場その場の炭に関する深い話や、技術のポイントも新鮮そのもの。

語り口も優しい鶴見先生と奥様

奥様が 3 日間の朝昼夕と出される食物が持つ本来の味を生かした料理、食生活、ストレ脱却などを経験に基づく奥を極めた進め方、アドバイス、どれをとっても充実した 3 日間でした。

その間、われわれの宿舎は古民家を宿泊施設に改装したオープン前の「人・空・田」。これが元の造りを活かしながら内装に木材をふんだんに使った趣のある宿、オーナーで仕掛人の永井さんの毎晩の囲炉裏端でのお話とおもてなしは夜中まで。赤そばが名物のようなのでいつの日か是非食べてみたいものです。

2 日目には早起きして「井内の棚田」を一望したくて城跡に上りました。

二日酔いには坂道の急坂はきつかったが登った甲斐があって、春間近の井内棚田の眺めは絶景、今度は秋の収穫前の黄金の棚田を・・・。

順調すぎたドラム缶の炭焼き

（追記）この風景を見ていると、此処の歴史や人々が暮らしてきた経緯に想いが馳せる。昔の風景はどうだっただろう。戦国時代は隠し田だったのか、昔の風景を想像したくなる。なぜこの風景に心が引かれるのだろう。これが、原先生の言う地形、文化、環境、暮らしが作る「場所性」なんだろうか。

同行した尾島さんは次のように表現した「光や土、時の積み重ねと人の交わりによって醸成された空（気）、その力は、この土地の祖先たちや営々と暮らしてきた現在の人々、特に地域の持続的発展のために試行錯誤している永井さんや応援する鶴見先生ご夫婦の存在も大きいと思うが一番はこの土地が持つ力のような気がする。自然というものに含まれる人の営みの積み重ねの尊さが感じられる所」だと。

贅沢なウバメガシの黒炭

彼女の心を、私なりに忖度して表現すると、この土地をおつくりになったありがたい「何ごとか（何者か）」と暮らしを続ける里の人の力だろう。「何ごとか」がおつくりになった風景は上ノ原や藤原にも感じる。

この町にある温泉施設「桜の湯」の「つるつる感」は心と体にいい温泉でした。

3 日目の朝は、この集落に残るかつての「茅場」を視察しました。此処の茅場は集落から遠く傾斜がきつく、利用しなくなってかなり経つのでススキも管が太く上部が曲がっています。野焼も容易ではないようです。屋根茅が不足している状態ですので集落で刈ってストックしておくか堆肥・マルチなどの農業資材として利用できたらいいのですが。この集落では樒（シキミ）の栽培が盛んですのでそれと絡めてみるのもいいのでは。

炭焼きの合間に焼いたツイストパン、窯の腹に見た小宇宙と流れ星、振り返りの漢字一文字感想など塾の活動にも参考になることをたくさん体験しました。鶴見先生、奥様、永井様、そして参加者の皆様

■2017定例活動①「春の風物詩・茅場の野焼き～今年は雪との闘い～」
=野焼き顛末記=　　草野　洋

お世話になりました。有難うございました。

今年の野焼は、4 月 29 日、30 日に行われました。昨年は80年ぶりの少雪で燃えすぎや飛び火など火との闘いでしたが、今年は一転、上ノ原は雪解けが遅く、残雪と不安定な天気との闘いでした。

従来通り機械除雪を行ったものの野焼面積が小さいことが予想されたため木粉炭融雪剤をまくなどの工夫（木粉炭の効果は実証されました【写真】）をし、その後の気温上昇とお天道様の力に頼ったものの前日の 28 日に見た印象は「しょぼい野焼になるなー」でした。

融雪剤（木粉炭）を撒いたところは雪が融けている

それでも野焼は茅場の保全に重要な作業、明日は、参加者 58 人（うち、エストニア国から外国人が 3 人、なによりも、今回は初参加者が 23 人もいる）、消防団や地元参加者を含めると 92 人がこの上ノ原に集う。何とかせねばとの思いが強くなりました。

春になればただの水になるのに今は厄介な固形物の雪、藤原の人々の苦労とむなしさが今更ながら身に沁みます。この雪で、十郎太沢も隠れて落ち込む危険があるので沢周りにテープで標示する作業中に案の定 2 度ほど沢に転落する羽目に。

危険個所をロープで表示

一度は人海戦術で除雪しようと試みましたが、効率が悪い。天気予報では、野焼本番の 30 日は、好天気だが、準備作業日の 29 日は降雨があるとのこと、除雪しても十分な乾きは期待できない。

一瞬見せた照り輝く谷川岳

除雪をしていると傾き始めた太陽の光を受けて照り輝く谷川岳が見られた。まるで氷河のようにぬめり輝いている。これだから上ノ原に来るのをやめられない。これもなにごとか（何者か）が造った風景。

皆さんに楽しんでもらうプログラムとして今回はツイストパン（遊びパン）焼きをすることにしました。そのための炭火の野炉を 2 か所作り、その夜の夕食後に 80 人分のパン生地をつくりました。この作業は、藤岡夫妻に大活躍してもらいました。

パン生地づくりと一人一個丸めた生地

さて、翌日、不安的中、雲は低く気温も低い、不安定な天気になってしまいました。前夜、作ったパン生地が発酵しすぎないように雪の上に置いていたところまんまとカラスの夫婦に 20 個ほど持っていかれました。

カラスに持っていかれ笑うしかない

藤岡夫妻はこの事態に落ち込んでいましたが、稲さんが「御鳥喰式（おとぐいしき）」みたいだと。カラスに「粢団子」（しどきだんご）をお供えし吉凶を占う、安芸の宮島などで行われている大変めでたい神事とのこと。藤岡さんはそれに救われたようです。しかし、まだべとついていたパン生地、カラスさん喉に詰まりませんでしたか？

区長さん、役場の課長も駆けつけていただきました

参加者が集まり、昼食も終わり、はじまりの式と野焼きと一年の作業の安全を祈る「山の口開け」神事のあと、作業にかかろうとしたら雨が降ってきました。あまり強くはならない、短時間で止むとの一幸さんの観天望気を頼りに急遽、ツイストパンを焼いてもらうことにして、各自茅場に入りの野焼き区域を見てもらうとともに「おすすめはクロモジ、NGはヤマウルシ」との注意を聞いて、パン焼きに使う「木の棒」を取ってもらいました。

みんなで炭火野炉を囲んでパン焼きで。やがて香ばしい香りが漂うようになると参加者の間に会話が生まれてきてにぎやかな状況になりました。狙い通りのコミュニケーションづくりになったようです。

その間もった天気も、作業に取り掛かろうとしたら強い雨、雷も鳴り始めたため、作業中止を決断、早めに宿に引き上げ、その後は宝川温泉などで時を過ごすことになりました。

棒に着けて炭火で焼くとこんがりキツネ色に、クロモジはいい香り

その夜は、初参加者のためにパワーポイントを使って塾の活動、野焼きの様子を上映、その後日付が変わるまでのお天気祭りが効いたのか、野焼本番の30日朝は天気は上々、気温も高く、早朝、上ノ原の現場調査では「昨日の雨の影響で乾きは充分でないものの着火時間を遅らしたら焼ける」と判断し、参加者には野焼面のススキを毛羽立てする作業をしてもらうことにしました。

毛羽立て作業

このことを4者協議で確認したのち、参加者に希望を聞き、毛羽立て、侵入木除去、茅場周辺散策の 3 班に分け、1 時間半ほどの作業等に入りました。

侵入木の除去

野焼きの開始は 10 時 30 分、今回は、可燃物の状況、周囲が残雪に囲まれていることから風上、斜面下部からの着火としました。

ジェットシュター、名前は「ほたかくん」

ことしから新兵器が登場。それは着火用ガスバーナーと自前のジェットシューターです。これも東京ガス、セブンイレブン助成金のお蔭です。

燃えはいまいちだが安全な野焼き

予想通り、可燃物も少なく、乾燥が十分でないため、迫力のない野焼となりましたが、C ブロックを約 5000m2を焼き、野焼本来の目的は達成しました。

ところによっては激しく

初参加者には、イメージと違った野焼で欲求不満だったかも知れませんが何しろ茅場の保全作業は「自然との闘い」、いや、「折り合い」です。こんな年もあります。

未黒野（すぐろの）

残雪と天候に悩まされ気をもんだ野焼でした。

魅力的で印象深い野焼きに参加して
インドレック・メルツ（和訳：松澤・西村）

半自然草原は、さまざまな在来種が生息する伝統的な農業生態系のひとつで、長い期間にわたる粗放的な人間活動により形作られてきており、生物多様性が高いことが特徴です。こうした複雑な生態系は、さまざまな機能や生態系サービスをもたらしており、日本でも私の母国エストニアでもよく似ています。（エストニアについてもっと情報が欲しい人はhttp://www.pky.ee/をご参照ください。訳者註：エストニア語ですがグーグル翻訳をつかえばある程度理解できます。）ヨーロッパ全体で、また日本も含めた世界各地でも、土地の利用形態の変化により、20世紀の間に半自然草原は大幅に減少してきました。生物多様性と伝統的な景観の保全のためには、半自然草原を、粗放的な手法で継続的に管理することが大事です。そうした管理手法の一つが野焼で、これはエストニアでは禁じられていますが日本では伝統的に行われています。

私の研究は半自然草原とそのバイオマスの代替利用に関するもので、それゆえ今回のみなかみ町藤原、上ノ原の草原での野焼きに参加し野焼のすすめかたをみられたのは非常に魅力的で、また印象深いものでした。残雪があったため野焼のできるエリアはやや限られていましたが、こうしたことはありうることだし、こうした自然界と人間界とのハーモニーを受け入れるのは当然のことでしょう。野焼イベントは非常に良く企画されており、パン作りや寝ている茅を持ちあげて空気を入れる活動など実践面でも、半自然草原の概要説明や野焼本番前のデモンストレーションなど理論面でも、また、温泉、交流会等娯楽的要素の面でもすべてがスムースに行われました。それに、宿も非常によかったし、食べ物のレベルも高いと思いました。シニアだけでなく若者も含め、各地から、多くの人々が参加して春のイベントを楽しんだことは、嬉しい驚きでした。私は、半自然草原の価値やこうした生態系の維持管理の重要性をより多くの人々に紹介し、アピールするために、この種のイベントは大事だと思っています。伝統的な農村文化の保全や地域社会との協働にも役立ちます。

春の野焼イベントに参加できてよかった。美しく興味深い日本の自然や生活の一端に触れる素晴らしい機会を与えてくださった皆さま全員に感謝したいと思います。またこのようなイベントに参加して皆様にお会いできるよう願っています。（東京大学国際高等研究所　サステイナビリティー連携研究機構、ポストドクター在籍）

■藤原現地報告
「スローライフ・イズ・ハードライフ」 北山　郁人

最近、地方移住や田舎暮らしの情報をよく目にします。しかし実際、田舎暮らしは楽じゃない。スローライフなんてたわごと。ハードライフです。家の中にはネズミが走り回り、それを狙って大きな青大将がやってくる。家の前のクリの木にはクマもやってきます。自然との共生なんて生易しいものではなく、まさに自然との闘いです。

北山家が家族4人で藤原に移住したのは8年前、日本中の山村を歩いて回り、利根川を遡りたどり着いたのが藤原でした。移住の第一条件は、古民家に住む事でした。地元の人たちにとっては、ぼろくて、おカネをかける価値のないナンバーワンです。これを自ら修復するところから始めました。しかし、築100 年以上とあって、床下が湿気ですべて腐っていました。断熱材は一切なく、外気がマイナス13度にもなると、家の中のものがすべて凍っていました。地元の方は、「よくあんなぼろくて寒いくずやにすむねー」といいますが、ちょっと工夫してやれば、快適な住みかとなります。それよりも、私にとって古民家は、人類の歴史と直結していると思っています。かつては、身の回りの素材だけで家を作り、囲炉裏で火をたきながら、家族で食事をし、子どもを産み育て、結婚式も葬式も行っていました。日本人の暮らしの源です。そんな古民家に自分たちの家族の歴史を重ねられるというのは、まことにロマンであると思います。生活が厳しい時代を生きてきた人々にとっては、貧しさと貧困の象徴であり、何の価値もない、だだの「くずや」かもしれません。しかし、いったん失われてしまえば、もう二度と復元することは不可能です。私が移住して8年で、藤原だけで6軒の古民家が消えました。火事で焼け、雪で押しつぶされ、重機の爪で取り壊されました。

田舎のお年寄りは、なんでもできます。というより何でも自分でやらなければならなかった。電気、ガス、水道、ガソリンが無くても生きていける智恵を持っています。昔は、大変苦しい生活であったはず、そんな生活から早く脱したいと必死で働いてきたはず、そのおかげで、我々がこんな豊かな生活を送れるようになったのだとも思います。しかし、便利な暮らしと引き換えに、人類の歴史の中で培ってきた大切なものも捨ててしまいました。その象徴が古民家であると思います。

■藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑬

中村　智子

今号は昨年秋から今年の春までの野鳥や野生動物たちの様子です。クマタカは、関ヶ原にいたとのこと。「上の原でも見ることが出来ると思うので、野鳥も楽しんで欲しい」との中村さんのメッセージとあわせてご覧ください。（編集子）

11 月 14 日カモシカの写真を撮っていて、ふと、横を見たらキツネが…。

11 月 14 日正面だけでなく、カモシカの後ろ姿！

11 月 17 日クマタカの写真を撮ることが出来た！

2 月 4 日、薄く雪が積もった朝、ミソサザイが飛び回っていた。

1 月 16 日、大雪の中、大きな猪が道路をトボトボと歩いていた。

4 月 28 日、西公園にキビタキ(上)やオオルリなどの夏鳥が飛んで来た。

■野守のつぶやき（10）
―野焼きに明け野焼きで終わる我らが春―

#
#

野守の冬仕事　霜月下旬から卯月中旬まで、上ノ原は雪の下。昔の農家なら俵づくりや縄ない、どぶろくや味噌づくりなどやることに事欠かなかった。現代の野守は冬場やることないから他所へ武者修行ばかりでなく、上ノ原だからこそやるべきことは何か。雪原かんじきトレッキング、動物の糞や足跡ウォッチング、樹木の冬芽観察会など何時でも出来る。和かんじき作りや茅選り、メープルシロップ作りなども仲間を集ってやってみたいもの。#

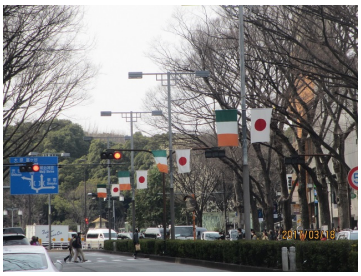
#

●冬場の流域交流武者修行　毎年1月恒例の小貝川（21日）と菅生沼（22日）の野焼き。塾の利根川流域交流活動の一環として団体参加。いずれも、地元住民からなるNPO会員多数が参加。　小貝川の場合、川沿いにノウルシの保全を主眼とするエリア→ヒメアマナ→タチスミレのエリアへと順番に火入れをしていく。4月には観桜会を兼ねてヒメアマナの観察会を行う。地元からも大勢参加して賑やかなことだろう。かつて、地元常総市民からなる「自然友の会」の初代会長・Gさんは「この花たちを絶滅から守れるか否か、常総市民の文化度が試されている」と語った由。流域交流は、学び多き武者修行の場でもある。

●ほどほどの攪乱が一番　2月14日～19日、目黒・自然教育園の「やさしい生態学講座」を受講した。お目当ては初日、西廣淳先生による「植物の共存を可能にする『ほどほどな攪乱』とは」。先生に開演前のハプニングご挨拶が出来た上に、とても嬉しいことがあった。「中程度の攪乱が効果的」のご説明にあたり、当塾による野焼きや茅刈りを好事例としてスライド7枚も使ってご紹介いただいのだ。帰路のビールの旨かったこと。

●野守が出会った雪の芸術作品　3月11日～12日。一般参加プログラムの初日は地元NPO奥利根水源地域ネットワークに協働、かまくらやキャンドルづくりと点灯作業のお手伝い。　翌日は、茅選り班とかんじきトレッキング班に分かれてそれぞれ雪の藤原で楽しい汗をかく。小生はかんじき班に参加。大幽洞窟の氷筍もさることながら、途中で見かけた大自然の芸術作品（写真）に静かな感動を覚えた。名付けて「明日への架け橋」。皆さまなら、何と命名？

●聖パトリック祭、初見聞　3月18日。アイルランドの守護聖人の誕生と日愛外交関係樹立60周年を祝うフエステイバル。昨夏の旅を回顧しつつ、メイン会場の代々木公園と表参道を訪ねてみた。ギネスビールやアイリッシュウイスキーなど飲食関係のテントが目立ち、エコ指向の企業などの協賛もあったが、ケルトの自然崇拝の歴史や文化のアピールはほとんど感じられずちょっと残念。



●セイタカアワダチソウの抜去　4月23日。「亀成川を愛する会」（千葉ニュータウン）主催のフデリンドウを守る活動に参加。彼らの自生地に侵入した天敵セイタカアワダチソウ。その幼苗を土手にへばり付いて引っこ抜く作業。根は横走していて、引っこ抜くと驚くなかれ大人の背丈ほどの長さ！　　正に、百聞不如一見。

●晩春、上ノ原の野焼き　4月28日～30日。火入れ本番の30日、上ノ原に外人を含む老若男女 92 人が入り会った（町役場、地元児童・消防団、営林署、町田工業他を含む）。雪上で都会と地元の子供たちが共に戯れる姿も。融雪剤木粉炭の試用、着火ガスバーナーやドローンの活躍など、正に「現代版入会」の様相を呈す。茅刈りの担い手たる古老衆の姿が見られなかったのが唯一の気懸り。これも、「現代版入会」構築過程の宿命か・・・。

天地（あめつち）の恵みいやませ野焼原　　清一郎

野焼きを詠んだ石井清一郎会員の佳句。五月、上ノ原は様々な新しい命の誕生に輝く。楽しみなこと。

平成 29 年皐月　（青）

～編集後記～

『茅風通信』第 51 号をお届けします。

今号は、春の風物詩として定着した「上ノ原の野焼き」を中心に特集しました。今年の野焼きも、準備から終了まで、貴重な体験の連続たったようです。自然が相手ですから、本当に何が起こるかわかりませんが、どんな状況でも、無理せず自然の変化の中に溶け込みながら最善を尽くすというのが、藤原流であり、青水の目標なのだと実感しました。

これから藤原「上ノ原」のフィールドでは、初夏から夏にかけてのプログラムが続きます。大勢の皆さまのご参加をお待ちしてます。（稲）